

## D.H.ロレンスにおけるエロティシズム

中山本文

## はじめに

Mircea Eliade (以下エリアーデ) は比較宗教学の立場から世界各地の宇宙開闢神話を検証して、その著 *Mephistopheles et l'androgyné* の中でこのような見解を述べている。- La plupart des divinités de la végétation et de la fertilité sont bisexuées ou comportent des traces d'androgynie.<sup>1</sup> つまり、彼は多くの創世神話の神が両性を具えているという事実を発見したのである。そして更なる研究と思索の結果、次のような考えを抱くようになる。人間誰にでも男・女は潜在的に存在し、精神的な完成はまさしく自己自身の中にこの両性具有を回復することにあり、存在するものすべては反対の一致を内抱している全体的な存在でなければならないと、そして更にそこに「異質性の統一」・「対立するものの融合」という観念が働いていることを突き止める。要するに、エリアーデは、人々にとって両性具有は人間の原初的存在の完成を象徴するものだと考えていたのである。

文学に目を転じれば、やはり同じく両性具有に人間の原型を夢想したドイツ・ロマン派がいる。彼らはこのシンボルに未来の完全な人間のあるべき姿を見、この状態の獲得こそ人類が向かうべき目標だとした。また、Hanore de Balzac はこの両性具有の問題を扱った *Seraphita* において、男と女を同時に愛する主人公を創造している。彼(彼女?) は本も読まないし、知識人と話することも全くないのに、その知的能力は、はるかに普通の人間の能力を凌いでいる。言うまでもなく、作者はここに完全なる人間をイメージしている。

D.H.Lawrence (以下ロレンス) も、その一連の神話的な作品が示唆する通り、両性具有に「全体性」を見た文人の一人であった。このことをまず最初に問題にした小説が *Women in Love* である。表面上、この小説は二組の男女の恋愛物語という構成になっているが、実はそれほど単純な物語ではない。主人公 Rupert Birkin (以下バーキン) の男への関心は女に対するそれに劣らず強い。むしろ上回っていると言ってもよい。これは疑いもなく、人間という存在の完成(成就)の物語である。以下の一節には、ロレンスの生の全体性の獲得に向ける意欲が十分に読み取れる。これは、バーキンとその友人 Gerald Critch (以下ジェラルド) が上半身裸になってレスリングもどきの取り組み合いをやった、あの物議をかもしたシーンの後で、二人の間で交わされる会話である。

"...One ought to wrestle and strive and be physically close. *It makes one sane....* We are mentally spiritually intimate, therefore we should be more or less physically intimate too... *it is more whole.*"...The two men began to dress.

"I think also that you are beautiful," said Birkin to Gerald,"and that is enjoyable too. *One should enjoy what is given.*

"You think I am beautiful—how do you mean, physically?"asked Gerald, his eyes glistening.

"Yes. You have a northern kind of beauty, like light refracted from snow ....and a beautiful, plastic form. Yes, that is there to enjoy as well. *We should enjoy everything.*"<sup>2</sup>

(イタリックは筆者による)

ここには明らかに同性愛が暗示されている。しかし、ここでパーキンが提示する同性愛は性的情熱の変種として捉えるべきものではなく、いわゆる「全体性」を獲得するための不可欠の要素として理解されるべきものであろう。上の引用が明示する通り、人間にはそういう要素もあった方が「健全」で「より全体性に近くなる」とロレンスが考えていたのは間違いない。“One should enjoy what is given.”というパーキンの言葉には、あるがままのかたちで自分の生を生きてゆきたいという、主人公の現世における自分の存在様態への苛立ちと願望が如実に表現されている。もはや明らかのように、ロレンスの生の全体性の回復を求める欲求は両性愛というかたちで表されている。

本稿の目的は1914年の *Study of Thomas Hardy* (以下「Hardy研究」) に始まったロレンスの両性愛的性愛の本質がいかなるものであり、いかに展開されているのかを晩年に至るまでの作品を通して検証することにある。

## I

それではロレンスの性愛論の検討に入るが、論を進めるにあたって、まず彼の思想に多大な影響を与えることになった Edward Carpenter (以下カーペンター) の「中性人」論を概観しておく必要がある。性心理学の領域で「中間の性」が議論されるようになったのは1870年代にオーストリアの K.H.Ulrichs (以下ウルリッヒス) が一連の小冊子で先鞭をつけて以来のことである。彼はそれらの小冊子の中で、両性の中間に生まれついたような人々がいることを指摘した。

“... there were people born in such a position — as it were on the dividing line between the sexes — that while belonging distinctly to one sex as far as their bodies are concerned they may be said to belong Mentally and Emotionally to the other ; that there were men for instance who might be described as of feminine soul enclosed in a male body ( anima muliebris in corpore virili inclusa ) or in other cases women whose definition would be just the reverse.”<sup>3</sup>

従来こういう人たちは異常扱いされていたが、彼は伝統的な学界の常識を覆し、通常の恋愛をする人たちより高位に位置づけて、Urnings (以下ウルニング) と呼んでいる。カーペンターは彼の説をそのまま受け入れることにはためらいながらも、ウルリッヒスが「中性」とも称すべき者たちの存在を認め、それに説明を加えるという近代における最初の試みをした人物という点で、大いに評価している。元々、性の解放に基づく自由社会の出現を夢見るカーペンターは、自分の内面的な問題でもあった「同性固着の衝動」にはそれまであまり触れないようにしていたのだが、ウルリッヒスや Walt Whitman の影響で、C.G.Jung (以下ユング) 以前にすでに *The Intermediate Sex* の中で

“Nature, it might appear, in mixing the elements which go to compose each individual does not always keep her two groups of ingredients — which represent the two sexes — properly apart but often throws them crosswise in a somewhat baffling manner now this way and now that...”<sup>5</sup>

という考えを明確に公言するようになる。そして「世界の最も偉大な指導者や芸術家」(the world's greatest leaders and artists)<sup>6</sup> たちが多分にこの性質を持っていると、この「中性」、すなわち心理的両性具有の顕著な特徴を指摘して、この「人類の新しいタイプ」が例外的に天賦の才に恵まれた人たちであると高く評価している。

この「ウルニング」は、カーペンターの分類によれば、身体上の構造には何ら常人とはっきり区別される点はないが、性質の点で明らかに異性を思わせる極端な人々と、極めて尋常に近い人々の2つに分けら

れる。前者は自分の最も深い恋愛感情や友情を自分の同性にしか打ち明けられない人たち、すなわち明白な同性愛者たちで、後者は普通の愛情も経験するが、また一面、同性愛的な傾向をも持った人たちである。更に彼には、こういう男女両性具有的型に属する人々は、以前は病気かデカダンスの結果であると断定されていたが、実際調査してみると、その多くが全く健全にその性を具え、筋肉も体格もよく発達し、挙措動作も全く正常で、彼らの身体組織にも体質にも全く異常は認められないと、近代の学者は往時の学者の伝統的な「病気」・「異常」説を否定していることなども加えて指摘している。

更に彼の見解では、彼らの同性への愛着心がすべて性的な行為へと発展していくと考えるのは大変な誤解で、「彼らの性情は往々にして極めて純情緒的である。」(they are often purely emotional in their character)<sup>7</sup> 彼らの同性愛が極めて「情緒的」であるという点は大いに興味をひく。このことはプラトンの『饗宴』における同性愛論を想起させる。ここでプラトンは男性間の同性愛はイデア界に飛翔する契機であると捉え、この関係が精神的高揚をもたらすものであることを強調している。Sigmund Freud の言うように、同性愛の欲求が幼児性への退行でないことは言うまでもない。いずれにしろ、カーペンターは両性愛や同性愛を異常としてではなく、人間の内的多様性の一面として肯定的に受け入れている。正に、その点にこそロレンスが共感を覚え、小説というかたちでそのテーマを追及した理由はある。1916年にコーンウォールで執筆した *Prologue to Women in Love* の中でパーキンが自分の内面の欲求を告白するというかたちで、ロレンスは自身の問題を告白している。コーンウォール滞在中に、当地の農夫 William Henry Hocking と深い仲になったことも *Prologue* の内容と深く関わっている。

カーペンターのロレンスに与えた影響の歴史的経緯については、*D.H. Lawrence and Edward Carpenter* の中で、E. Delavenay が詳察している。*The Rainbow* と *Women in Love* の間にある同性愛に対する作者の態度の違いに関する彼の説明は説得力があり、首肯せざるをえない。彼が E.M. Forster や Philip Heseltine を通してカーペンターの作品を知り、大いに興味を覚えたのは間違いない。「Hardy 研究」の内容を吟味すれば、ロレンスがカーペンターの *The Intermediate Sex* や *Intermediate Types* からいかに大きな影響を受けていたかが理解できる。両者の著作の内容の類似は一目瞭然である。

## II

カーペンターの言う「男性の身体内に囲まれた女性の靈魂とも云うべき男や、またその正反対の女」という中間的な人間という考え方はユングの「男性の内に潜む女性的なもの」、「女性の内に潜む男性的なもの」、すなわち「アニマ」・「アニムス」と極めてよく似ている。ユングのもつ超個人的な性格が、個人の無意識が集合的無意識に根ざしていることを彼に発見させた。そして個人のみ限定された観点から超個人的な観点への転換を、すなわち自我中心的な立場から普遍的方向への転換を可能にしたのであった。この性質のゆえに、人間という存在を「宇宙的存在」(a cosmic being P.195)<sup>8</sup> として捉え、「反対の特質が常に内在する全体的存在」(whole beings in whom the opposite qualities are even-present P.19)<sup>9</sup> とみなすことができるのだ。ユング派心理学の継承者 J. Singer は「アニマ」・「アニムス」をこう解釈する。

The androgyne is a symbol of the Self par excellence. But more than that the androgyne is a *Representation in human form* of the principle of wholeness. -- Androgyne is the outcome of a dynamism based on the application of energy in an organic system that is open-ended and that interfaces with an open-ended universe.<sup>10</sup>

誰の心の中にも存在している「異性的なもの」の表れ方は個人によって異なっている。ユングは個人の中における「男性的なもの」と「女性的なもの」のダイナミックな相互関係こそ男女両性具有的の本質だと考えていた。両性の間に生じ、相互を結びつけようと働くこのエネルギーに両性具有的の意義を見いだしていたのである。彼にとっては、「性欲」は両性具有的宇宙エネルギーの肉体的、霊的な表れのひとつにすぎなかった。そして同時にこれは存在の変容を求める宇宙の意志の顕現でもある。シンガーの両性具有論が大

いに我々の関心を引くのはその点においてである。彼女の考えによれば、「アニマ」・「アニムス」は人間の形において表された「全体性」の表象なのである。この「全体性」にはあらゆる対立物が包含される。科学的・合理的なものとは科学的・神話的なもの、自我とアニマ・アニムス、陰と陽など様々な対立概念がそこには混在している。

こう考えてくると、異性愛も同性愛も両性愛も結局はひとつの問題なのだということが明らかになってくる。アメリカの精神医学会が同性愛を「病的」なものとする公的見解を覆したのはつい近年のこと。同性愛が遺伝子によって決定された傾向でないことはすでに自明の理となっている。確かに異性ホルモンの分泌の差異によって「男らしさ」や「女らしさ」に影響が及ぶことはありえる。しかし、カーペンターやシンガーたちの研究でも明らかなように、同性愛行動は特定の体型をした人に限られるわけではない。何か、異質なもの同志を結びつけようと働く力があって、それが無限に多様な様式や方向となって活動するエネルギーを生み出すのではなかろうか。シンガーは、愛によって発生するエネルギーは性的にも非性的にも表れる、自由な流動する性質のものとした上で、それが性的にあらわれた場合の多様性をこう述べている。

The possibility exists that this free-flowing energy may be expressed wherever it is attracted; that is in intimacy with members of one's own sex with members of the opposite sex or a third alternative, with members of both.<sup>11</sup>

シンガーの両性具有論は1910年代のロレンスの思想と極めてよく似ている。*Prologue* で、バーキンは、自らのうちに隠していた男たちに対する「捨て去りたいと思っていた恥ずべき欲望」<sup>12</sup> をこう告白する。

All the time he recognized that although he was always drawn to women feeling more at home with a woman than with a man yet it was for men that he felt the hot flushing roused attraction which a man is supposed to feel for the other sex....<sup>13</sup>

ロレンスのこの主人公が抱く欲望は、彼が *Women in Love* や「Hardy研究」を書いた時期に限られるものではなく、その後もほとんどすべての作品に妖しい彩りを与えている。後期三部作の中の *The Plumed Serpent* は特にその傾向がはっきり表れた小説である。E. Delavenay は、この問題の追求は *The Plumed Serpent* で終わっているという判断をしているが、実はそうではない。それは、*Lady Chatterley's Lover* の Oliver Mellors (以下メラーズ) の性質を考えれば明らかであろう。森の中で森番として隠遁者のような暮らしをしていた彼の所に、チャタレー家の夫人 Connie (以下コニー) が訪れるようになる。現実から離れて暮らすことを決意していた彼は、再び現実の波が押し寄せてくる気配を感じると、縁を切りたいと思っていた過去の記憶が甦ってくる。その記憶の一部がバーキンの例の問題と関わっている。かつての軍隊時代の自分と大佐との関係をこう回想する。—the colonel who had loved him and whom he had loved<sup>14</sup> バーキンと違って、メラーズは自分の欲望を自分からも他人からも隠すことはしない。メラーズはコニーに向かってこう打ち明ける。2人が世界の未来像を語り合ってる場面である。

“And what will the real future have to be like?”

“God knows! I can feel something inside me, all mixed up with a lot of rage. But what it really amounts to, I don't know.”

“Shall I tell you?” she said, looking into his face. “Shall I tell you what you have that other men don't have, and that will make the future? Shall I tell you?”

“Tell me then,” he replied.

"It's the courage of your own tenderness, that's what it is : like when you put your hand on my tail and say I've got a pretty tail."

The grin came flickering on his face.

"That!" he said.

Then he sat thinking.

"Ay!" he said. "You're right. It's that really. It's that all the way through. I knew it with the men. I had to be in touch with them, physically, and not go back on it. I had to be bodily aware of them—and a bit tender to them—even if I put'em through hell."

[p.277]

これは明らかに、彼がパーキンの系譜に属するものであることを証明している。また同時に「Hardy研究」における内なる異性のテーマとの密接な関わりの明白な証左でもある。ロレンスはこの評論で「内なる異性」との調和がとれている人についてこう述べている。

The real voluptuary is a man who is female as well as male and who lives according to the female side of his nature like Lord Byron.<sup>16</sup>

“the courage of your own tenderness”をもっているとコニーに言わせるメラーズは疑いもなく、「自己の気性の中のメスなる側面」に従って生きている男である。コニーはその“tenderness”をもって接してくるメラーズに絶対の信頼を寄せ、それは「他の誰ももっていない、あなただけもっているもの」だと高く評価している。それはやがて彼女に階級の壁も、周囲の批難による屈辱をも乗り切る勇気を与えることになる。もはや、メラーズの“tenderness”が「Hardy研究」の主張と密接な関係にあることは疑う余地がない。メラーズの告白は、シンガー流に考えれば、自己の「男性性」と内なる「雌なるもの」を自然に調和的に生きていることを明らかにしたものに他ならない。作者を代弁する Tomy Dukes（以下トミー）は健全なる男女（real intelligent wholesome men and wholesome nice women）〔P.75〕が未来社会を構築してくれることを期待して言う、“There may even come a civilisation of genuine men and women instead of our little lot of clever-jacks all at the intelligence age of seven.”〔P.75〕これはことばを変えれば、「肉体の復活」（the resurrection of the body）〔P.75〕に基づく「新しい人種」の誕生への期待だった。

momentary state when in living the union between the male and the female is consummatedを達成した二人が到達した世界は無限で永遠である。二人はこの合一によりトミーの言う「肉体の甦り」を成就して「純粋な男女」を獲得した。

### III

異質なるものの結合というテーマは *The Plumed Serpent* でもっと明確な形をとっている。この作品は、革命後の混迷するメキシコに、かつてアステカ族が崇拝したケッツアルコアトルを復活させようとする Don Ramon（以下ラモン）と Don Cipriano（以下シプリアーノ）、それにその運動に反発と魅惑を同時に覚えながらも、次第に未知の存在形式に目を開かれていく、ヨーロッパを捨ててきた女 Kate Leslie（以下ケイト）を軸に展開されていく。

ラモンのケッツアルコアトル復活運動の目的は「創造半ば」（half-created）<sup>17</sup> の、不安定なメキシコ人を「人間の内にある人間の魂たるあの中心」（that centre which is the soul of a man in a man）〔P.78〕に根づかせることにある。ラモンは自らケッツアルコアトルとなり、人々の魂の救済を行おうとする。西洋の精神文明を吸収して育ったケイトとは違って、ラモンは一人の人間であるとは、個人的な自己と非個人的な自己がひとつに統合された存在のことであり、それこそひとつの魂であり、自己の全体性なのだ

いう認識に達した人物である。「私」を成す「究極の私」は「ずっと遠い所」(the beyond) [P.120] からくる。私たちはその「究極の私」をつかむためには自我の殻を脱ぎ捨てなければならないと信じている。こういう「開かれた精神」の持ち主ゆえに“the morning star”という着想も生まれてくる。ラモンはケツツアルコアトルという神の神秘を人々に説明するものとして“the morning star”という隠喩をつかう。もちろん、ここで重要なのは星自体ではなく、その存在様態である。それはこう説明されている The magnificence of the watchful morning star that watches between the night and the day, the gleaming clue to the two opposites. [P.90] この夜と昼の間で輝く星は“the gleaming clue to the two opposites”であると補足されているように、その肝心な点は夜であるながら夜でない、また昼であって昼でないというところにある。作者はこの両極の中間に位置するこの星に、異質な両性の関係性の神秘的な意義を見い出だしていたのである。この認識に達し、受け入れて初めて人は真の自己を獲得し、完全なる存在となりうるのだ。言い換えれば、この“the morning star”は“the quick of all things”へ達する道程を照らし出すほのかな灯りということになろう。個人の存在は自分一人のもの、個人に個有なものと位置づける西欧社会で40才になるまで生きてきたケイトが魂を揺さぶられ、「一個の完成した私」という概念に疑問を抱き始めるのはラモンのそういう極めて非個人的な一面ゆえである。そして更に、ラモンの仕事を手伝うシプリアーノに“To me Ramon is more than life.”(P.306)と言わせる程に完全に彼を屈服せしめるラモンの不思議な力はそこから生まれてくる。ラモンはケイトに向かって語りかける—

There must be manifestations. We must change back to the vision of the living cosmos; we must. The oldest Pan is in us and he will not be denier. In cold blood and in hot blood both we must make the change. That is how man is made. I accept the must from the oldest Pan in my soul together and arrives at a conclusion the time of alternatives has gone. I must. No more than that. I am the First Man of Quetzalcoatl, as well as a man. I accept myself entire, and proceed to make destiny. Why what else can I do? [P.316]

ラモンがこの世界から隔たっているように思えるのは彼が自分の魂に認めているこの“must”に従って生きているからに他ならない。ついにケイトの強固な固い殻を周囲にまとった知的な意識的な自我はその根底から揺らぎ始める。Let me close my eyes to him and open only my soul. [P.184] という気持ちになる。メキシコにやってくるまでのケイトは各個人が“a complete self a complete soul an accomplished I” [P.105] を持っているとして疑わなかった。この世から隔たっているかに思える二人に関わっていくうちに、次第に自分が“a woman unknown to herself” [P.236] であるかのように気持ちに変化し始める。正にここにこそ彼女が不安を覚えながらも、ラモンのケツツアルコアトル運動に魅かれていく理由はある。“definite meanings”や“a god of one fixed purport” [P.58] にうんざりしてヨーロッパ精神と決別した彼女が“All a confusion of contradictory gleams of meaning” [P.58] の化身である神、すなわち諸々の矛盾する意味内容をもつ神に心を奪われるのは当然の帰結であろう。そこに彼女は「固定した内容をもつ神」にない神秘を感じたのだ。

ラモン＝ケツツアルコアトルは自らそう宣言しているように、“the eagle”と“the snake”の、“the earth”と“the air”の、即ち“Two Ways” [P.341] のLordである。そして更に、やはり対極のイメージを伝える昼と夜の間位置する“the morning star”でもある。まぎれもなくこの神はエリアーデが世界の創世神話の両性具有神に洞察したあの「対立物の一致」を暗示する「合一」の神である。“Father”であるこの神が“womb” [P.125] をもつ神であるという事実がそのことを物語っている。ロレンスがここに両性具有神を意図していることに疑問の余地はない。エリアーデが神なるものを「異質性の統一体」、すなわち両性具有と見なしていたように、ロレンスも究極の实在を両性具有と把えていたことの証左である。「Hardy研究」における主張と極めて類似している。

主題の類似性という点では、*Women in Love* と *The Plumed Serpent* の両作品もよく似ている。例

えば、ラモンとバーキンである。「私は自己を全部受け入れて運命をつくっていく」というラモンのことばは、「すべてを享受して生きて行くべきだ」と言うバーキンの信念と同じ響きをもたないだろうか。この点を考えても、両作品が同じ目的をもって書かれた小説であることは明らかであろう。二人のことばは両小説の中心課題にふれるものであり、ここを読み落としては作品の価値そのものの評価を誤ってしまいかねない程重要な要素である。

またケイトの意識の変化に目を転じれば、やはり同じく興味深く、注目すべき点がある。西欧文明と異質な世界をラモンやシプリアーノに開示されていくにつれ、ケイトが「何にもまして自己を放棄したかった」(of so many things she wanted to abandon) [P.311] という思いを抱くようになっていくところである。これはコニーがメラーズとの“touch”を通して自覚するに到った「彼女は自分の強い輝く、女の力を放棄したい」(She would give up her own hard bright female power.) [P.136] という心境と符合しないだろうか。この二人の女性たちの覚醒も、それぞれの小説の核心に関わる重大なテーマである。二人の女性たちの変容の類似性は同時にこの二つの小説、*The Plumed Serpent* と *Lady Chatterley's Lover* の主題の関連性を示している。この意味では、リーダーシップ小説と言われる *Aaron's Rod* や *Kangaroo* を始め、*Women in Love* 以下 *Lady Chatterley's Lover* まで一貫してあるテーマにとらわれていたと言えよう。

## IV

バーキンがジェラルドとの格闘の後に言った、「触れ合い」の重要性は *Lady Chatterley's Lover* や *The Plumed Serpent* ばかりでなく、ロレンス最後の小説 *The Man Who Died* においても繰り返されている。極めて寓意性に富んだこの作品はキリスト教神話のキリストとエジプト神話のイシス（正確には女神イシスに自分の存在の秘密を封じ込めて生きている女）の二人が「触れ合い」を成就する物語である。この「死んだ男」はイシスの神殿を守るこの女に「生に対する柔らかな、不思議な勇氣」(a soft strange courage of life)<sup>19</sup> を認める。一方、女は全身傷だらけの、死の影のただよう男に、弟の裏切りのために殺されて、バラバラに切り裂かれて川に捨てられたオシリスを見る。女は、夫オシリスの断片をひとつずつ拾い集めて夫を再生させようとしたイシスのように、一心不乱に男の傷口に油を塗る。女の手のやさしく癒すような動きや、その手のひらの暖かみにふれ、次第に死の影は消え、新しい生命が全身に満ち渡るのが覚える。こうして彼に過去の自分の誤りの本質が明らかになっていく。

Suddenly it dawned on him: I asked them all to serve me with the corpse of their love. And in the end I offered them only the corpse of my love. This is my body—take and eat—my corpse—A vivid shame went through him. “After all,” he thought, “I wanted them to love with dead bodies. If I had kissed Judas with live love, perhaps he would never have kissed me with death. Perhaps he loved me in the flesh, and I willed that he should love me bodylessly, with the corpse of love —

There dawned on him the reality of the soft warm love which is in touch and which is full of delight.<sup>20</sup>

女の暖かい生命に触れ、かつて自分が知らなかった新しい生命がみなぎって、未知の存在に変容していくのを感じる—“Now I am not myself. I am something now—” [P.168] 女が男の脇腹の傷に胸を当て、力を込めて抱き寄せると、今まで覚えたことのない欲望に目覚める。そしてこの時、男はバーキンやメラーズ、そしてラモンやシプリアーノたちが触れ合うことによって知った「小さな日常の自我」の「大いなる神話的な意識」への変容の喜びを経験する。この時男の全身を貫く「欲望の衝撃」は言うまでもなく「合一」へ向かう結合のエネルギーである。しかし、それは同時に、自我の死であり、大いなる意識の解放である。ここに「触れ合い」の効用がある。小さな自我の大いなる自我への変質は「完全の完成」であり、「全体性の獲得」である。この点において、両性具有の表象において暗示されている完全なる人間の

イメージと見事に重なり合う。ここで獲得された「生の柔軟性」・「深遠なる生」はある時は異性を求め、またある時は同性を求める「全体的な生」と深く結び付いている。この開かれた生ゆえに、イシスの女の“I am full of Osiris. I am full of the risen Osiris!” [P.169] という認識も生まれてくる。つまり、彼女は自己の内に、ロレンスが「Hardy研究」で主張した「内なる雄性」を樹立したのだ。状況は男にしても同じ。もはや、「触れ合いが自分の体に残っている」という満足感にひたっている男は、裏切られて死に追いやられた時のように、小さな生が余儀なくする孤独に苦しむことはない。ローマ人の追っ手が身辺に迫り、立ち去らねばならなくなると、仕方なく女を残して行くことを決意する。彼女は神殿のそばに家を建てて、そこで暮らすことを望むが、執拗に求めはしない。子供を宿している女にしては、不自然と思えるほどに諦めがよすぎる。また男にしても、あまりにも簡単に妊娠している女を後に残して行こうとする。しかし、この辺りが神話の神話たるゆえんなのかもしれない。おそらく、その理由は結合の成就によって「生きた温かさ」として女を自分の内に保っているからであり、女の場合も、*Lady Chatterley's lover* のコニーのように、自分の内に彼の子供を、すなわち「子供として男を内に宿している」からに他ならない。要するに、二人は触れ合いの成就によってそれぞれお互いに、自分の内に自己の存在を完成してくれる他者を、異質なるものを、内なる異質を樹立したからに他ならない。ここに二人のさわやかな別離の理由がある。

### むすび

ロレンスにとって、男女両性具有は「全体性」・「完全性」の原理の表象なのであった。それは、「私的な自己」を、「非人格的な大なる自己」といつも触れ合わせておきたいというロレンスの熱情の表れであった。パーキンのジェラルドに対する情熱、ラモンとシプリアーノの結び付きはすべて「小さな自己」から、偉大なる生の源泉と緊密なつながりを保っていた「大なる自己」への変容の情熱であった。その意味で「全体的な自己」への回帰であり、「神話的存在」の回復の試みだったとも言えよう。「自己のうちなる反対の特質」がそれ自身を補完するものとして、更にその反対の特質を必要とする可能性は十分にある。そう考えると、「男」として存在している「小さな自己」が時として、「女」を求め、またある時は同性である「男」を必要とするのは極めて自然なことである。ロレンスの描く人物たちが同性の友人たちに愛着を覚えるのはそのためであり、「小さな自己」を補完する存在だったからである。ロレンスのエロティシズムは異性にも同性にも向かう、いわば生物学的性と社会的・心理的性別の区別が行われる以前の“old Adam”や“old Eve”にも似た、「柔らかな性」の回復への衝動だったのである。この心理的態度としての両性愛は *Women in love* でパーキンが言う「自己の存在のすべて」を享受する唯一の方向であり、精神の自由を獲得する道なのである。*The Man Who Died* の最後の場面で男が旅立つ時に発する“Tomorrow is another day.” [P.173] ということばの自由な、開放的な響きはそのことを物語っている。両性具有という形で表れたロレンスのエロティシズムは「狭隘な個人的な自己」から「超個人的な自己」への解放のエネルギーであったとも言えよう。

性愛がいかなるかたちを取ろうと、それが聖なる神話的宇宙を垣間見るといふ心の要求に基づくものであることは言うまでもない。ロレンスのエロティシズムの本質はそういうところにあったように思われる。

### Notes

1. Mircea Eliade, *Mephistopheles et l'androgynie* (Paris : Gallimard, 1962) pp.158-159
2. D.H.Lawrence, *Women in Love* (London : Heinemann, 1964) p.265
3. Edward Carpenter, *The Intermediate Sex : A Study of Some Transitional Types of Men and Women* (London : George Allen & Unwin, 1912) p.19
4. Carpenter op. cit., p.20 この言葉はK.H.Ulrichsの造語で、“children of heaven”を意味する。
5. Carpenter op. cit., p.17



6. Carpenter op. cit., p.38
7. Carpenter op. cit., p.26
8. June Singer, *Androgyny : The Opposites Within* (Boston : Sigo Press, 1989) p.195
9. Singer op. cit., p.199
10. Singer op. cit., p.199
11. Singer op. cit., p.206
12. D.H.Lawrence, *The Posthumous Papers of D.H.Lawrence*, ed. Edward D.Mcdonald (New York : The Viking Press,1936) P.150
13. Lawrence op. cit., p.104
14. Emile Delavenay, *D.H.Lawrence and Edward Carpenter : A Study in Edwardian Transition* (New York : Taplinger Publishing Company,1971) p.234
15. D.H.Lawrence *Lady Chatterley's Lover*, ed. Michael Squires (Cambridge : Cambridge UP, 1993) p.141以下このテキストからの引用はページ数のみを記すことにする。
16. Lawrence op. cit., p.459
17. Lawrence op. cit., p.460
18. D.H.Lawrence, *The Plumed Serpent*, ed. L.D.Clark (Cambridge : Cambridge UP, 1987) p.135以下このテキストからの引用はページ数のみを記すことにする。
19. D.H.Lawrence, *Love Among the Haystacks and Other Stories* (Harmondsworth : Penguin Books, 1930) p.165
20. Lawrence op. cit., p.166
21. Lawrence op. cit., p.173

